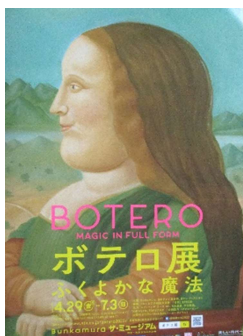


ボテロ展 ふくよかな魔法

Bunkamura ザ・ミュージアム（渋谷） 2022.04.29～07.03

名古屋市美術館 22.07.16～09.25 京都市京セラ美術館 22.10.08～12.11



南米コロンビア出身の巨匠「フェルナンド・ボテロ」(1932～)は、1950年後半から欧米で高く評価され、画伯が注目されたのは1963年ニューヨークの「メトロポリタン美術館」で「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の《モナ・リザ》展覧時、ニューヨーク「近代美術館 (MoMA) の入り口・ホール」に彼の《12歳のモナ・リザ》が展示されたことに始まる。

画伯の生誕90年を記念した展覧会で、作品を特徴づけているのは、“あらゆる形が膨らんでいる”ということで、モチーフは人物も動物もふくよかで、果物は熟れきっているかのように膨らみ、楽器や日用品さえも膨張していることで独特の「魔法」で注目される。

みどころ1 《モナ・リザの横顔》が世界初公開されている。 上図

モナ・リザは画伯が描き続けているテーマの一つで、90歳を超迎える今も美術家として探求し続ける気迫伝わる作品で世界初公開として注目されている。

みどころ2 国内では26年振りの大規模展である。

本人の監修により、初期から近年までの油彩・水彩・素描「70点」で構成。

みどころ3 世界中で愛されるふくよかな作品である。

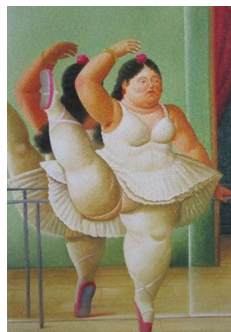
これまで世界各国で70年以上も開催された個展では、観る人を惹きつけてやまないのは、ふくよかでユーモア、ときに風刺を交えた独特な作風に、作品自体の大きさにも圧倒されて、豊かで生の喜びをも感じさせることである。

みどころ4 なぜ、ふくよかな絵を描き続けるのか？

画伯のボリュームへの関心は、既に若年時代の作品に見られ、“ボリュームを表現することで芸術的な美を表現することを目指している”“私の作風は、作品の代名詞であるだけでなく、後世に残す遺産である”としている。



マリー＝アントワネット



レッスン中のバレリーナ



踊る人たち